

分数の合成・分解

小学校第1学年で数を最初に学習する際、導入のすぐ後で、数の合成・分解の学習が行われる。後のたし算・ひき算の学習も念頭に、特に10の合成・分解はていねいに扱われる。

一方、小学校第3学年で[分数の数としての学習](#)が本格的に始まり、たし算やひき算も扱われるようになる際、分数についての合成・分解は明示的には行われなように思われる。もちろん、たし算を学習すれば $\frac{1}{5} + \frac{2}{5}$ が $\frac{3}{5}$ になることは扱われるし、 $\frac{1}{5}$ m の7つ分なども扱われる。しかし第1学年で「5は1と4、2と3」などと学習したように、「 $\frac{4}{5}$ は $\frac{1}{5}$ と $\frac{3}{5}$ 、 $\frac{2}{5}$ と $\frac{2}{5}$ 」といった分解をたし算を扱う前に扱っていないのではないだろうか。さらに「10は1と9、2と8、…」と10の分解を丁寧に扱ったようには、「1は $\frac{1}{5}$ と $\frac{4}{5}$ 、 $\frac{2}{5}$ と $\frac{3}{5}$ 、…」などと1の分解を丁寧に扱うこともないのではないだろうか。

もちろん「もう3年生なんだから1年生みたいにする必要はない」ということなのかもしれない。しかし、上のような活動は、分数の大小比較やたし算、ひき算の学習の素地になるだけでなく、単位分数を[操作の対象として感じる](#)ことを促すという点で、分数自体の理解を支える可能性があるとも考えられる。

子どもたちが分数、特に数としての分数をよく理解できていないということであるならば、そもそも子どもたちが[数と最初にどのように出会ったのか](#)、そしてどのような経験を経て数を[数として受け入れていったのか](#)を振り返り、分数の学習に生かすことを考えてみてもいいのではないだろうか。

(参考：[自然数と分数の学習の比較](#))

[【算数・数学教育におけるIAQに戻る】](#)